

本町の出しと朝鮮通信使の練り物の一部

## 新発見の氷川祭礼絵巻

その絵巻の写真を初めて見たのは平成3年の夏のことでした。東京大学の黒田日出男先生と、当時来日されていたイリノイ大学のロナルド・トビ先生が、「文政九年氷川祭礼絵巻」を調査するために来館された時のことです。「こんな絵巻がニューヨークにあったのですが、川越のものではないですか。」と流暢な日本語を話されるトビ先生にアルバムの中のスナップ写真を見せられたとき、しばらく、まさか、どうして、信じられないという言葉が頭の中をぐるぐる廻ったのを覚えています。「町名から見て川越にまちがいないと思いますよ。」

とおっしゃる黒田先生の言葉に励まされ、絵巻の全容を知るべくニューヨーク・パブリック・ライブラリーに写真の郵送をお願いしました。

この絵巻は川越氷川祭礼と明記はされていませんが、上下十ヶ町の町名が全て合致し、その十ヶ町が加わる祭礼が氷川神社であることから、川越以外の祭礼とは考えられません。

今まで川越氷川祭礼の全容がわかる絵画的資料で最も古いものは氷川神社蔵「文政九年氷川祭礼絵巻」でした。しかし、山車の形からこの絵巻の成立は文政9年以前である事は確実です。精巧な

画面の魅力も併せて、これは川越氷川祭礼研究史上、画期的な発見といえるでしょう。この新発見の氷川祭礼絵巻について見てみましょう。

### 1、なぜニューヨークに

この氷川祭礼絵巻は、ニューヨーク・パブリック・ライブラリーの所蔵です。ここには、個人の寄付によるいくつかの特殊コレクションが存在し、ウィリアム・オーガスタス・スペンサー（1870～1912）を記念したコレクションは、絵入本の収集を基本とし、世界各国を対象とした収集を行っていることで有名です。日本の絵画資料の収集は、戦後に購入されたものが多く、室町時代以降特に江戸時代の物語絵巻、絵本が多数収集され、600点にのぼる収蔵品は、世界屈指とされています。そして、問題の氷川祭礼絵巻もこのスペンサー・コレクションに含まれます。

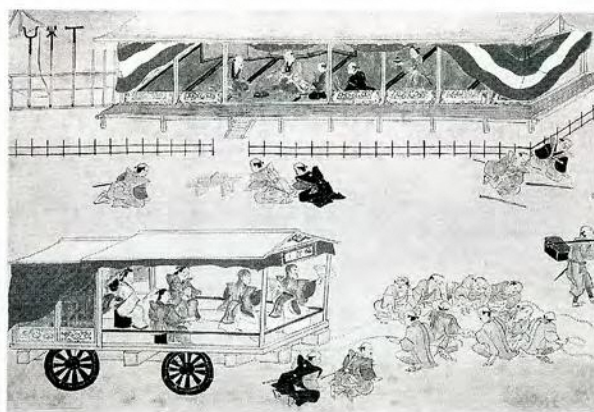
この氷川祭礼絵巻が、ニューヨークに渡ったのは、戦後のことです。東京・本郷の古書商であった反町重雄氏を通じてスペンサー・コレクションに収蔵されました。その前の所蔵者などについては、一切分かっていません。

### 2、絵巻の構成と内容

絵巻は、2巻で構成されています。1巻目は、神輿の行列から始まり、高沢町—江戸町—本町—南町で終わっています。2巻目は喜多町—志喜(義)町—多賀町—上松江—鍛冶町—志田町の順番です。

#### ①出しについて

出しの形態は、十ヶ町全部に共通している特徴



高沢町の踊り屋台と藩主上覧

があります。四角形の箱を台にして2本の棒を両端に添えて担ぎ棒とし4人で担ぐ形です。そして、箱には棹を立て、上部には各々を象徴する作り物が付きます。これらを見てみますと折口信夫が「髯籠の話」の中で旗指物の竿頭の飾りを『だし』と呼び、それと山車の呼び方との関係を示唆していますが、絵巻に描かれた山車を見る限りうなずける説です。

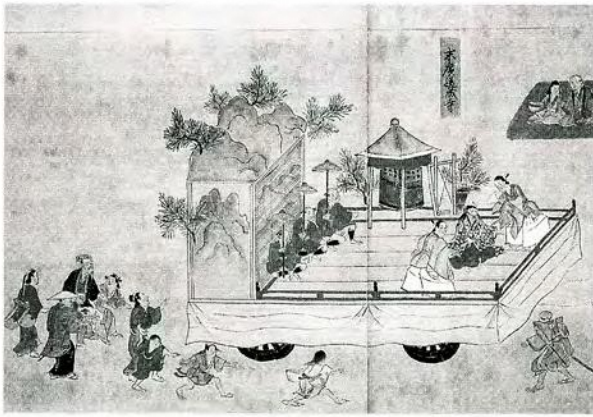
絵巻にみる出しは、文政9年(1826)の絵巻に比べると非常に簡素であり、祭礼行列の主役というより町内の行列の先頭に来るプラカードの役割をしています。

#### ②屋台について

絵巻には、踊り屋台と山屋台の2種類が描かれています。屋根付きの踊り屋台は、各町内1台ずつ出しており、出しと同じように祭礼行列にかかせないものだったようです。屋台の構造は、「文政九年氷川祭礼絵巻」さらに現在市の有形民俗文化

町名	スペンサー・コレクション蔵 氷川祭礼絵巻	順番	文政九年 氷川祭礼絵巻	順番	天保十五年 氷川祭礼絵馬	順番
高沢町	猿	1	猿	3	猿	2
江戸町	三階傘	2	岩に為朝	4	岩に為朝	3
本町	猿	3	猿	5	関羽周倉	4
南町	三日月に秋の草花	4	月に秋の草花	1	天の岩戸	5
喜多町	大黒	5	俵藤太秀郷の人形	2	俵藤太秀郷の人形	1
志義町	昇旗	6	松に布袋	8	松に布袋	7
多賀町	御幣に薄	7	諫鼓	9	諫鼓	8
上松江	吹き流し	8	亀之上浦島	10	亀之上浦島	9
鍛冶町	月に秋の草花	9	小狐丸	6	小狐丸	10
志多町	昇旗	10	月に薄	7	小槌珊瑚玉	6

山車の変遷



南町の山屋台

財に指定されている幸町の踊り屋台の形に引き継がれています。山屋台は、前部分が舞台、後部分が山や岩等の造作がある露天の大型屋台です。

踊り屋台と山屋台の上では、能や幸若舞、浄瑠璃などに起源を持つと思われる演目が上演されています。この中で、現在知られているのは、南町の国性爺、多賀町の五人男、志多町の信濃源氏で、他の演目についてはよくわかりません。

### ③その他練り物

山車と屋台の他に行列を構成しているものには、神輿の行列と各町内の練り物があります。神輿の行列については、この後の「文政九年氷川祭礼絵巻」や現在の形態と大差ありません。

さて、現在の川越祭は山車が中心の祭ですが、江戸時代は練り物が行列の花形でした。この絵巻でも、各町内から趣向を凝らした練り物が出ています。

花駕籠や本町の朝鮮通信使の行列、仮装に子供が多いというのは、文政9年の氷川祭礼絵巻にも共通して描かれている点です。また、高沢町の行



志喜(義)町の母衣武者

列の前を歩くささら獅子舞の行列と全町内合せて21人もの母衣武者の仮装は、現在の石原のささら獅子舞と古谷本郷のほろ祭りを連想させます。その他、大江山凱陣の学び、汐汲みの学び、大津絵の学び、金魚の曳物など興味が尽きない練り物が出てきます。

### 3、絵巻はいつ描かれたか

さて、当然この絵巻に描かれた祭礼行列はいつの川越氷川祭礼を写したのかという疑問が出てきます。画面を見ながら、なにかヒントはないかと見ていますと氷川神社の山田勝利先生から「氷川神社が正一位をいただいたのは享保元年ですよ。」と教えていただきました。確かに氷川神社古文書に「享保元年宗源宣旨」があり、そうするとこの絵巻は享保元年(1716)以降であることがわかります。さらに踊り屋台の演目をみていますと南町



正一位氷川神社の額がかけられた鳥居

では「国性爺」が出ています。近松門左衛門作の国性爺の初演は正徳5年(1715)大坂でのことで、江戸での初演は享保2年(1717)です。このことから可能性の上限は享保2年であるといえましょう。それでは肝心の下限はいつかといいますと、なかなか情報がなくはっきりした事はいえません。絵巻の成立時期は、江戸中期頃と言葉をにごしている状態です。

謎は深まるばかり、まだまだ更なる研究が求められます。皆さんには、平成9年度秋の企画展、「川越氷川祭礼の展開(仮称)」展でもっと詳しくご覧いただく予定です。おたのしみに。

[写真は全てスポンサーコレクション蔵氷川祭礼絵巻]

(学芸係 田中 敦子)

# 押絵羽子板について

## 1.はじめに

民俗展示室の職人コーナーでは、押絵羽子板を製作する面相押絵師の展示を現在行っています。押絵羽子板の歴史や面相押絵師である千田貞雄氏から伺った仕事の話など、展示できなかったことを今回紹介したいと思います。

## 2.押絵羽子板の誕生

過去から現在に至るまで、羽子板には様々な種類がありました。しかし、いま私たちが「羽子板」と言う場合は、「押絵羽子板」を指すことが多いようです。ここでは、押絵羽子板が誕生するまでの歴史を見てみましょう。

文安元年(1444)の『<sup>かがくしゅう</sup>下学集』に「羽子板 正月ニ之ヲ用ユ」とあります。また『<sup>かんもんぎよき</sup>看聞御記』永享4年(1432)正月5日の条には、公家が集まり「こきの子勝負」をしたと記されています。「こきの子勝負」とは「羽根つき」のことで、すでに正月に羽子板を使った羽根つきが行われていたことがわかります。

当時、羽子板は歳暮の贈り物でもありました。その羽子板は、蒔絵などを施した左義長羽子板のようなものではないかと考えられています。左義長は、占いや厄払いの信仰を伴う正月の火祭りです。左義長羽子板は、この行事を羽子板に描き、その年の吉事の到来を祝い祈る正月の飾り物です。この羽子板は、両面とも胡粉を盛り上げ、金箔を押すなど豪華美麗なつくりになっていました。

やがて、左義長羽子板の図柄は、泥絵の具の一筆描きに簡略化され、羽根つきの羽子板に使われるようになりました。また、羽子板に描かれた公家装束の人々は、庶民の間では夫婦と大勢の子供を描いた家族風景であると考えられ、左義長行事から離れて子孫繁栄を意図するようになりました。

江戸時代には羽根つき遊びは、武家より町家で行われました。町人文化が盛んになる宝暦(1751~1764)から文化文政期(1804~1830)に、庶人の生活感情に合った初日の出・宝尽し・役者の似

顔絵などの図柄が描かれるようになりました。これを描絵羽子板と言います。この頃には紙に絵を描き、羽子板に貼った貼絵羽子板もありました。

押絵は、型紙に布を貼り、綿を入れてくるんだ細工物です。押絵の「押す」は、「貼る」「貼り付ける」の意味です。江戸初期に押絵は、上流婦人の手芸として、栞・紙入れ・小箱などを飾りました。その後、元文4年(1739)には『花結錦絵合』という押絵作りの教本が出版され、庶民の間でも盛んに押絵が作られるようになりました。

羽子板に押絵が取り入れられて、庶民好みの押絵羽子板が誕生したのは文化文政頃でした。

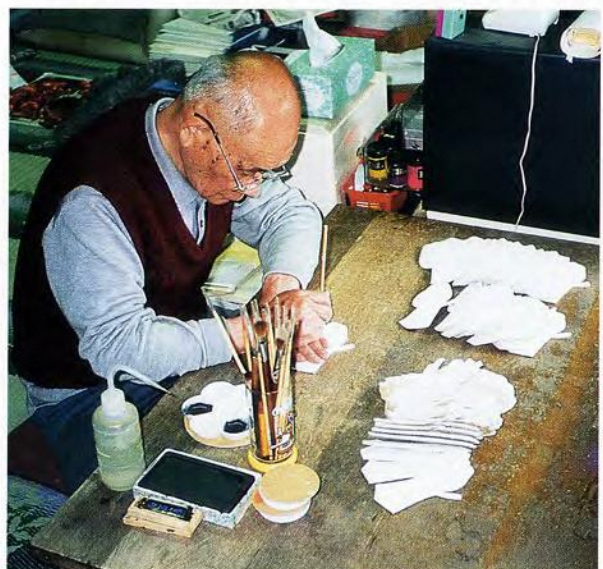
## 3.面相押絵師の生活 —千田貞雄氏の場合—

千田貞雄氏から伺った話の中で、面相押絵師への第一歩である修業時代について紹介します。

千田氏は大正8年6月13日に川越市小ヶ谷にある最明寺の住職長男として生まれました。

昭和7年に新座市野火止の横山文六氏に弟子入りしました。横山氏は、所沢で押絵羽子板の発展に尽力した武蔵力蔵氏の門弟でした。

千田氏は弟子入りしたてのころ、出来上がった押絵を加須、所沢、水戸、千葉の間屋に届ける仕事をしました。水戸、千葉に届ける時は、柳行李に押絵を詰め込み、上向きにした蓋の中にも押絵



千田貞雄氏 仕事風景

を入れ、それらを背負って汽車に乗りました。その荷物は子供の体には不釣り合いな大きさだったので、駅員に「手荷物だけを送ったらどうか。」と言われたことがあるそうです。県内へ届ける時は、柳行李を自転車の荷台につけたり、量が多いと自転車にリヤカーをつけて運びました。加須の間屋へ納品する際、正午に親方の家を出て、帰りが朝4時になったことがありました。それは、問屋が代金200円を一銭硬貨でくれたことが原因でした。荷台に積んだ硬貨はとても重く、自転車をこぐのが大変でした。さらに暗い帰り道で人につけられ、やっとの思いで交番の灯を見つけて安心したそうです。当時は街灯が少なく、日が落ちると真っ暗になり、川を渡るのもとても怖く感じられたそうです。

このような2年が過ぎ、ようやく押絵を作らせてもらえるようになりましたが、親方は出来が悪いと怒るだけで、仕事を教えてくれませんでした。小学生の時、先生に「仕事は見て盗むものだ。」と教えてもらったので挫けることなく、親方の手先などを見て技術を習得しました。

親方の家に住み込み、衣食住の面倒はすべてしてもらかわりに給料は無給でした。食事は朝昼

夕食・おやつと仕事が午前0時を過ぎる場合は夜食ができました。正月と盆には、1円くらいの小遣いをもらいました。

親方が面相を描いていたので、千田氏は押絵の技術が身についた後に面相を描かせてもらいました。面相も親方の筆の運びを見て覚えました。

面相を描くようになってすぐに徴兵検査を受けて、昭和14年に軍隊に入りました。千田氏の修業時代は、こうして終わりを告げました。

千田氏のお話の中で「今でも、自分は一人前になったとは思っていません。心の底から満足できる作品が作れた時こそ、一人前ではないでしょうか。」という言葉が印象的でした。良いものを厳しく追い求める真摯な姿勢が、美しい押絵羽子板を生み出す力なのだろうと感じました。

最後になりましたが、今回の展示にあたりご指導、ご協力くださいました千田貞雄・ふさ子ご夫妻に心よりお礼申しあげます。

【参考文献】

『羽子板』山田徳兵衛 芸艸堂 平成6年

『埼玉県民俗工芸調査報告書 第10集 押絵羽子板』

埼玉県立民俗文化センター 平成5年

『人形歳時記』小林すみ江 婦女界出版社 平成8年

(学芸係 松本 順子)



職人コーナーの展示

# 次原氏以下三人宛大道寺政繁判物について

—宿中道造并掃除奉行—

宿中道造并掃除奉行

一唐人小路

徒気原新兵衛

金谷彦右衛門尉

内村将監

清田庄左衛門尉

以上

右小路悪所候者其町之衆申合時々刻々可為造之候  
縦洪水之時分も道ぬからさる様ニ地形窪所へハ石  
土を持懸いかにも結構ニ可造立事一宿町人物上之  
前ニ有之義ニ候於自今ハ奉行衆無々沙汰可申付者也  
一 小路毎日可致掃除事  
一 屋敷之くねおもて小路之分を吉を以くミかきニ  
致之可然事

一 宿中火之番厳密ニ可致之事

右条々若於相違ハ奉行衆不可有曲者也仍如件

未 十一月廿日

(花押)



「次原新兵衛他三人宛大道寺政繁判物」(次原家文書)

## 1.はじめに

今年度、八王子の次原氏より24点の古文書が寄託された。次原氏については以前『博物館だより』第8号拙稿「戦国時代の次原氏について」において、若干の考察を行なった。要点のみ記すと次原氏は、戦国末期には本宿整備の中心的存在となり、江戸時代を通して江戸町の名主として活躍した家柄であった。

寄託された古文書のほとんどは江戸時代のものであり、内容も多様な「覚書」が多く、町政や城下の様子を知りうるものは見当たらない。

その中に戦国期に関係する古文書が2点ある。

1点は、「天正十年(1587)十月二日付次原新三郎宛大道寺政繁判物」であり、この文書は明らかに写である。

もう1点は、「年未詳十一月廿日付次原新兵衛他三人宛大道寺政繁判物」である。この文書については、原本である可能性が高いと考えられる。

今回は、この年未詳11月20日付次原新兵衛他3人宛の文書が原本かどうかについての確認を含めて、この文書の紹介を行ないたい。

## 2.「次原新兵衛他三人宛大道寺政繁判物」について

本文書はすでに『川越市史』史料編中世Ⅱや『新



「次原新兵衛他三人宛大道寺政繁判物」(武州文書)

編埼玉県史』史料編中世2などに、活字で紹介されている。それらはすべて「武州文書」を典拠としており、「武州文書」では、「家ニモトノ城主大道寺政繁及ビ酒井重忠ヨリノ文書ヲ蔵ス」とあり、原文書が次原氏によって所蔵されていることを記している。

文政11年(1828)に完成した『新編武蔵風土記稿』にも、「武州文書」と同様のことが記載されている。

つまり、原本は次原氏が所蔵している可能性が高いということである。こうした状況下において



「元龜元年大道寺政繁書状」(円覺寺文書)

今回寄託された古文書群の中に、本文書が見出だされたのである。

法量は縦330ミリ×横446ミリである。

折紙の形式であり、紙は比較的質の悪いものが使用されている。しみが全体的に広がっており、特に地の部分がひどい。

書風は、現在確認されている元龜元年(1570)円覺寺宛大道寺政繁書状の原本(円覺寺文書)のものと、全体的に同風と感じられる。特に「可」・「相」「候」・「月」などの文字は大変似ている。

筆線の太細の変化は、漢字同士や漢字とかなでもはっきりとあらわれている。

筆致のいきおいや力強さといい、また、墨継ぎによる潤濁や墨の濃淡の差といい、原本と思われるふしが強く感じられる。花押の部分も、元龜元年の大道寺政繁書状(円覺寺文書)の花押と比べてみても、差違はほとんどみられない。

すなわち、本文書の由緒や文書そのものをみても、本文書が原本であるということが、間違いないように思われる。

次に、この文書の年代について考えてみたい。「未」年と記されていることと、大道寺政繁が活躍した時期を考えると、元龜2年(1571)と天正11年(1583)の二つが考えられる。このような場合文書発給者の花押が、年代推定の一番の手がかりとなる。

大道寺政繁の花押は、現在2種類確認されており、一つは、元龜元年円覺寺衆中に宛てた書状の

花押である。もう一つは、天正4年(1576)万人坊に宛てた判物の花押であり、本文書の花押がさきに掲げた元龜元年のものと大変類似しているので、本文書の年代は、元龜2年と考えるのが妥当ではなかろうか。

つまり、本文書は元龜2年に大道寺政繁が、城下の有力商人である次原新兵衛ら4名に宛てた原本であろうということである。

その内容は、次原新兵衛以下3名を奉行衆に任命して、宿の小路の整備と掃除を含めた取締りを命じたものである。

### 3.おわりに

本文書が原本か否かについての検討を、不十分ではあるが行なってみた。正直なところ、本文書が原本であるという確証はもてない。それは、現存する大道寺政繁書状の原本が非常に少なく、それらとの比較が十分に行えないことにもある。

しかし、前節の過程から、本文書が原本であるという可能性は非常に高い。

今後、これを契機に、本文書についての検討が進めば幸いである。

なお確認のため、本文書の解説文も載せておいた。併せて御検討いただければ幸いである。

(付記) 今回この資料の掲載にあたり、資料所蔵者である次原満氏をはじめ、以下の方々から多大な御協力を賜った。

円覺寺 様

鎌倉国宝館学芸員 内藤浩史氏

埼玉県立文書館学芸員 新井浩文氏

ここに、厚くお礼申し上げる次第である。

【参考文献】

『武州文書 入間郡十三』

『新編埼玉県史』通史編中世2

同 史料編中世2

『川越市史』史料編中世Ⅱ

『鎌倉市史』史料編第二

『戦国遺文』第1～6巻

拙稿「戦国時代の次原氏について」『川越市立博物館だより』第8号

(教育普及係 井口 信久)

## 平成9年度の主な事業

### ○特別展示室の展示計画

- ◆第10回企画展 町割から都市計画へ 3月22日(土)～5月11日(日)
- ◆第41回埼玉県名刀展 5月25日(日)～6月8日(日)
- ◆第7回収蔵品展 7月19日(土)～9月15日(月)
- ◆第11回企画展 川越氷川祭礼の展開 10月4日(土)～11月3日(月)
- ◆ミニ展 一むかしの勉強・むかしの遊び— 1月24日(土)～3月8日(日)
- ◆第12回企画展 近世陶磁への招待 3月28日(土)～5月10日(日)

### ○講座・教室

#### ◆野外博物館教室

- 新河岸川河岸場跡を訪ねて 4月26日(土)
- 喜多院・東照宮を歩く 5月25日(日)
- 鎌倉道を歩く 10月19日(日)
- なつかしのチンチン電車の跡を訪ねて 11月16日(日)

#### ◆歴史講演会—江戸時代の川越—

- 第1回 11月15日(土)
- 第2回 11月22日(土)
- 第3回 11月29日(土)
- 第4回 12月6日(土)

#### ◆子供博物館教室

- | 前期        | 後期        |
|-----------|-----------|
| 7月30日(水)  | 11月23日(日) |
| 7月31日(木)  | 12月20日(土) |
| 8月1日(金)   | 12月21日(日) |
| 8月21日(木)  | 2月1日(日)   |
| 9月27日(土)  | 3月1日(日)   |
| 10月25日(土) |           |

#### ◆古文書講座(連続6回講座)

- ① 5月17日(土)
- ② 5月24日(土)
- ③ 5月31日(土)
- ④ 6月7日(土)
- ⑤ 6月14日(土)
- ⑥ 6月21日(土)

#### ◆博物館歴史講座(連続3回講座)

- ① 8月20日(水)
- ② 8月27日(水)
- ③ 9月3日(水)

#### ◆土器作り講座(連続4回講座)

- ① 9月7日(日)
- ② 9月20日(土)
- ③ 9月21日(日)
- ④ 10月5日(日) ※予備日として10月12日

#### ◆絵図を読む(連続4回講座)

- ① 2月21日(土)
- ② 2月28日(土)
- ③ 3月7日(土)
- ④ 3月8日(日)

### ○全館燻蒸のため休館 6月30日(月)～7月10日(木)

・講座・教室の募集は、「広報川越」などで行ないます。詳しい内容は博物館にお問い合わせ下さい。

発行日 平成9年3月31日

発行 川越市立博物館

〒350 川越市郭町2丁目30番1号 ☎0492-22-5399